

町民活動のあゆみ

めむろ町民活動支援センター開設二十周年



表紙の写真

「めむろ町民活動支援センターのつどい」（2026年2月11日）
参加者と記念撮影。200名を超える方に参加いただきました。



目次

めむろ町民活動支援センター開設二十周年を迎えて

町長インタビュー 芽室町長 手島旭氏 4

つながる・広がる・町民活動の二十年

① 「めむろ町民活動支援センターのつどい」

活動発表より 9

イベントスナップ 10

芽室花火大会実行委員会 12

上美生中学校生徒会 14

NPO法人上美生 16

公立芽室病院をみんなで支える会 19

②活動団体のあゆみ（まちの暮らしの変化とともに）

芽室山の会

芽室町どんぐり会

育児ネットめむろ

芽室町民歩く会

めむろ歴史探訪会

十年後の芽室を語る

めむろ町民活動支援センター二十年のあゆみ

町民活動の年表 町民活動に関わる町の出来事

センター事業のあゆみ

めむろ人まち育て助成金交付事業一覧

センター登録団体一覧

めむろ町民活動支援センター職員より

・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・
・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・
・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・
・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・
58	51	48	42	40	39	35	32	30	28	26	24	23	

めむろ町民活動支援センター

開設二十周年を迎えて

芽室町長 手島 旭氏

めむろ町民活動支援センターは、芽室町の事業として二〇〇五年(平成十七年)に開設。当時、手島町長は芽室町役場企画財政課職員として計画づくりに関わりました。二十年前から現在に至るまでの住民と行政の協働のまちづくりについて、お話を伺いました。(二〇二六年二月十八日)

——めむろ町民活動支援センター(以下、センター)が開設された背景として、二十年前の芽室町のことを教えてください。

手島町長 二〇〇〇年に市町村合併の議論があつて、芽室町は帯広市・中札内村との合併を検討していたんですね。一方で、合併しない場合について「芽室町自主自立のまちづくり町民検討会議」というものを作り、百人近い住民が参加して検討していました。議会でも議論して、

最終的に自主自立を選びました。

自主自立といっても具体的にどういうことを住民の皆さんにも一緒に頑張っていたのか、どのようなことを目指すのかというところを何か示さなきゃいけないよね、というところからスタートして、この検討会議をおして芽室町自主自立構想をまとめました。そしてそれをもとに「芽室町自主自立推進プラン」を作成しました。

——「自主自立推進プラン」はどのようなものだったのでしょうか？

手島町長 僕が企画財政課職員時代に作ったものなんです。自立するためには公助だけではできないので、共助や自助が必要になってきます。そこで、当時流行りでもあったんですけど「協働」という言葉が出てきます。協働のまちづくりの実践ということで、住民、議会、行政が役割分担をしていきましょう、というこ



とをプランでまとめています。財政的にも痛みが生じることも書いています。

住民、議会、行政の役割分担については、図に落とし込んだ芽室町地域・行政経営システムというものを作り、取り組みを進めていきました。

——住民の反応はいかがでしたか？

手島町長 プランは冊子にして全戸配布したので浸透していたと思うんです。かなりの人数に向け説明もしたので、「自主自立を選んだことは良いでしょう、そしてそのためにはやらなきゃいけないことも理解しますよ」という感じだったと思うんですよね。結構前向きだったと思いますよ。

町内会が協力する「公共サービスパートナー」※の制度ができた、話をしたら自主自立するために動いてくれるし、検討してくれるし、行動してくれるという感じでした。

僕が職員時代から感じていたのは、芽室町の人の良さというか人の活動の魅力というか。昔から活動団体が多い町だし、町のためとか、自分たちのためにも含めて、いろいろやっていこうという思いは強いところでした。

自分自身の経験を振り返ると、僕の子どもが小さかった頃は、子ども祭りみたいな町内の集まりをやっていましたし、隣近所との付き合いも良くて、町内会の力も大きかったかなと思うんですよ。

※町が行ってきた公共サービスを町民団体が有償ボランティアとして担う制度

——その中でセンターのような「活動の拠点」が施策として上がってきたのは、なぜだったのですか？

手島町長 もともと町民力とか町民活動力みたいのが強いから、方向さえ同じように向いてくれれば、協働は成り立つだろうなと思っていました。ただ、行政と住民がある意味では離れていたんですよ、それぞれ頑張っていたけれど。

だから行政と住民がいかに近づくことが出来るか、一緒にまちづくりできるかが課題で、ひとつのスタイルとして「公共サービスパートナー」を作ったり、条例を作ったりして、それで精一杯でした。

そこで行政と住民の間でコーディネートするところ、間に立つようなところが必要じゃないかという発想があつて。「共に働いていきましょう、行政も頑張るけど、住民の皆さんも頑張ってください」となったときに、それぞれのやることが分かっている、お互いのことをお伝えできるようなところも必要だよねという感じでしたね。



町長インタビュー

町長インタビュー

開設二十周年を迎えて

——町村規模の自治体で、町民活動支援センターのような「中間支援機関」を設置している町は北海道内を見てもほとんどありません。センターがあることで、住民と行政の関係性が変わるといふ期待があったのでしょうか？

手島町長 二〇〇〇年に市町村合併について議論できたことは転機でした。このままのやり方で行政だけが引っ張っていくのは無理だよね、住民の力がやっぱり必要だね、と。それが自治としては正しい姿なんですよ、もともと。住民で自ら治めていくっていうのが本当は筋だと思うんですよね。ともに働いて、この町を将来に向けても持続していかなきゃいけないよねという発想には、住民の力が不可欠、そしてセンターのようなどころはやっぱり必要だとなりました。

——現在のセンターや町民活動は、どのように町長の目に映っていますか？

手島町長 今の姿が本当に目指していた姿だと思っています。団体の皆さんが「センターに行けば何とかかなる」「何か支援してもらえろ」と相談が寄せられる形になったのが、僕としても嬉しい。

コミュニティの形も多様化しているこういう時代だから、センターの役割はクローズアップされてきていると思います。

自主自立構想とか自主自立推進プランができて、センターも少しずつ機能してきて、ちょっとずつ「自らこういうことをやってみよう」と住民の気持ちや活動が変化していったと思います。



先日の「めむろ町民活動支援センターのつどい」で発表された四団体の活動だって、行政が主導しているのがひとつもないんですね。全部住民の皆さんが自発的にやっています。行政が関わっていても、後ろから支えているというくらいで。ああいう住民活動が成り立っているということ自体が、やっぱり力があると思うんですね。芽室町民自体がね。そう思ってますね。

——「センターのつどい」では、活動している魅力的な人たちが団体があつて、そこから元気づけられるものがありました。町の魅力ですよね。

手島町長 住民同士で尊重するし、何かをやらうとする人を支えようと思う人もいる。「活動していかないのが良くない、じゃなくて、できるんだよ」っていう土壌がありますよね。自分が全部やらなくてもいいけども、少しでも協力して、一緒に何かをやることができる町なんだと思つてもらいたい。

住民がそう思つたとき、センターの皆さんに相談に乗つてもらえたらと思います。（センター職員は）行政に対して、お金だけでなくて、いろんな支援の形もありますよね、というように話してもらえれば、行政が表に出るのではなくて、後ろからちよつと押してあげることができますよね。それが、協働になるんです。

——これから茅室町の自主自立の姿というのはどのように進んでいくのでしょうか。

手島町長 行政としては二つの柱があつて。「住民の安心安全のためにサービスをいかに提供しつつ衰退させないか」ということと、「将来に向けた投資が必要だ」ということです。

住民の安心安全の部分は、いかに生きがいや住みがいをもって暮らせるかということで、ベースに住民活動がないと駄目だと思つています。

どんなに行政が頑張つてサービスをやらうとしても、疲弊していたり思いをもつて活動していかない町であれば、やっぱり衰退してしまうと思うんです。

だから住民活動が活発化、活性化しているということが大事になってくる。ここが伸びていけば、町はきちんと持続できるかなと思つています。

——ありがとうございます。当時、開設に関わった方々の情熱を感じました。この二十年の積み重ね、試行錯誤の中で、行政と住民、そして団体間で良い関係性が出てきたのだなと思えました。受け継いで、つないでいきたいです。



2026年2月11日に開催した「めむろ町民活動支援センターのつどい」で、「構想」「プラン」の資料を提示しながらセンター開設の経緯を話す手島町長

つながる・広がる町民活動の二十年①

めむろ町民活動支援センターのつどい
活動発表より



めむろ町民活動支援センターのつどい イベントスナップ

2026年2月11日 駅前プラザめむろーどにて



町長挨拶
4団体による活動発表



トークフォークダンス



ステージ発表
芽室民謡会
歌声タイム
たんぽぽの会



コーヒーの提供
抽選会



そば、どん菓子の提供
フリーマーケット





芽室花火大会実行委員会

夏の花火大会を復活させたい！

二〇一七年、当時所属していた芽室町商工会青年部の中にいた私を含めた四名は、三年前の二〇一四年に幕を閉じた商工会主催の花火大会「商江夏まつり」を新たな形で復活させたいとの思いで動き始めました。

お金もない、あてもないところから少しずつ進み始め、開催まで二年を要しましたが、二〇一九年について五年ぶりの復活を遂げ、今では芽室町で一番人が集まるお祭りへと成長しました。



記憶に残る思い出を子どもたちと一緒に

私たちが子どもの頃に行っていた楽しかった地元のお祭り。大人になって地元を離れた同級生が久しぶりに帰省した時に会える場所でもあります。

そういう思い出の場所や集まれる場所を、次の世代の子どもたちにも残してあげたいという思いを大切にしています。

どうせなら、一緒に花火大会やろうということで、子どもたちにどんな花火を観たいか、どんな曲に合わせて花火を観たいかアンケートを取りました。

それからどんどんアイデアが出てきて、子どもたちが司会や花火の構成を考えるまでになっていきました。

運営してる人達も様々です。芽室町の二十代〜四十代を中心に地元の商工業者、農業者、役場の職員、主婦にサラリーマン。このお祭りを通して出会った仲間たちが『地元の子どもたちに大人になっても記憶に残る思い出を』という共通の目標のもと、共に花火大会を作り上げていくこのお祭りは他にはない魅力があり、



第1回実行委員長 谷口 尚広さん

まさに人と人のつながりが形になったお祭りだと思えます。

人と人のつながりを次世代へ

「人と人とのつながりが次世代へと引き継がれていく」そんなお祭りを私たちは目指しています。

それが結果的に子どもたちの郷土愛を育み、芽室町に住み続けたい、芽室町に帰りたいと少しでも思ってくれたら、素敵なことだなと思っています。



2019



2023



2023



2025

がいて緊張したけれど、
 本番はたくさんの人
 た。そばにいてくれ助けて
 くれました。安心してし
 ました。
 実行委員になり、夜
 にみんなが集まって練
 習することが楽しかつ
 たです。練習後の母さ
 んが作ってくれたごは
 んもおいしかったです。
 困った時は大人の人は
 そばにいてくれ助けて
 くれました。安心してし
 ました。

た。「よかったよ」といわ
 れて、自信が付きまし
 ました。
 華音が終わったら、
 発表会が簡単になりま
 した。なぜなら、たく
 さんの人の前で話をし
 たから簡単に思えたか
 らです。
 花火大会と一緒に成
 功させてよかったです。
 す。たくさんの人に

「司会」、「ダンス」
 の三つに分かれ、その
 中で「飾り」と「司
 会」をしました。

華音が終わったら、
 発表会が簡単になりま
 した。なぜなら、たく
 さんの人の前で話をし
 たから簡単に思えたか
 らです。

こども華音実行委員
 福井 琥十朗さん
 (芽室小学校4年)

今までの練習を頼りに
 頑張ることができまし
 ました。
 飾りつけはペンキで
 塗った後、みんなが手
 形を付けて、より一体
 感が生まれる看板にな
 りました。



上美生中学校生徒会



生徒会が作成した地域紹介動画は、こちらからご覧いただけます。

生徒会活動のテーマは「繋がる」

私達上美生中学校生徒会は「繋がる」というテーマで活動しています。この学校は、小規模校だからこそ、生徒、先生一人ひとりの仲が良く深いつながりを持った学校にしたい、また、この中学校は地域との関わりが深いので、地域とのつながりも意識したいという部分から、このテーマにしました。

私達は、新たな「繋がり」を生み出したり、今ある「繋がり」を深める事ができるような生徒会でありたいと考えています。

給食交流と地域交流

私達が特に「繋がる」というテーマを意識して企画したのは、給食交流と、地域交流です。

給食交流は「学年の壁を越える」をテーマに、つながりや交流を深めることを目的で、給食時間に他学年の生徒と交流するという活動です。全校生徒を三つのグループに分け、それぞれの教室でグループごとに給食を食べるとい、小規模

校だからこそできる取り組みです。

普段あまり話さない先輩、後輩と交流することができ、実際に新入生が来た時に企画し、新たな交流や会話のきっかけになったりしました。

また、中には「仲のいい人と話したのですが、意外と知らなかった一面がたくさん知ることができました」「今まで話したことのなかった後輩から〇〇先輩と呼ばれてすごく嬉しかった」などという声も聞こえてきました。

地域交流は、学校内だけではなく「世代の壁を越えて語り合う」というテーマで、学校内や地域内のつながりを広げ、深めることを目的に企画しました。当日は地域の方々や中学校に来ていただき、「上美生の今、未来」についてなど様々なことについて話し、意見を交流しました。

話し合いを通して、この地域をより良くするための意見や、地域の方々の思い出など、様々なことを知ることができました。また、地域の方々が「中学生が自分たちで何かをしたいなら協力する」と言ってくれたりし、この地域のつながりを、改めて感じました。



令和7年度前期副会長 山本 昂さん (中学2年生)
令和7年度後期会長 森 絢音さん (中学2年生)

また、当日は、防災士の方や老友会、記者の方々にもお越しいただきました。

「Talk to Me」では先生や生徒を放送室にゲストとしてお招きし、武勇伝や今までで一番怖かったことなどを話題に広く語りました。

実はこの企画ができる前に、「Talking with Teachers」という企画があり、中には先生だけを招き、お話を伺っていたのですが、「Talk to Me」では先生だけではなく、生徒にもゲストの枠を広げ、企画しました。先生・生徒がより身近な存在になるように、新たな会話やちよっ



としたつながりを生み出すことを目標に放送を企画し、ゲストの興味深い話や意外な一面をのぞくことができました。はじめの頃は、一問一答のようない形式で放送していたのですが、面接のような雰囲気になつてしまいました。生徒に興味を持って聞いてもらうために、生徒もゲストも自分たちも楽しめる放送にしようと試行錯誤を繰り返してきました。これからもゲストや生徒に「楽しかった」「また聞きたい」と言ってもらえるような放送にしていきたいです。

この放送活動を通して直接的な交流でなくても、このよ

うに発信することで新たなつながりが生まれたりもする、ということを実感することができました。

新聞づくり・動画制作で 地域内外へ発信

新聞制作も地域や学校のことを紹介し、知り、親しみを持ってもらおうと作り始めました。この新聞は、生徒や先生のおすすめや情報などを入れ、「誰かの会話の種になるような新聞を」というテーマを大事にして作りました。

制作の途中で、内容を地域や学校の話題だけにしたらど

うだろうかという意見も出ましたが、このテーマを大事にし、このような形で作ってきました。地域や学校のちよつとした会話などから新たなつながりが生まれることもあるなと思うので、小さい学校だからこそ、お互いのことをよく知り、会話が飛び交う学校にしたいと思っています。

また、上美生への留学を迷っている留学生に向けて、地域を紹介する動画を制作したりなどの活動もしています。このような動画を見て、上美生という地域に興味を持ってもらえればなと思っています。

一人ひとりの繋がりを大切に

生徒会が行っている最近の活動では学校全体の単なる交流や環境改善だけではなく、企画から生まれる小さな喜びや楽しみ、驚きを見い出してもらうことも目標にしています。

例えば、学年で分かれてただそうじをするだけではなく、全校で協力しながら行う「そうじ交流」という企画に挑戦

しようとしています。また、「あの先輩のノートを見たい！」というような声を多く聞き、学年の壁を越えてノートの共有をする企画も行っています。具体的には、先輩や同学年の人のノートを一ページずつ印刷し廊下に掲示していきます。そうじ交流では学年ごとではなく、全校生徒で協力しながらそうじに取り組みしようと計画を立てています。

このように、私達は人を「つなげる」事ができる生徒会を目指し、活動しています。これらの企画・交流を通じて上美生や自分たちについて語り合い、地域のつながりを改めて認識することができました。

この学校は、とても小さい学校だからこそ、小規模校にしかできない、生徒同士や地域との連携を深めて、一人ひとりを大切にしていきたいです。そのためには、生徒会として、生徒と生徒、学校と地域をつなげていける、つながりを作っていけるような生徒会にしていきたいです。

NPO法人上美生

住民の声から始まった

上美生の地域づくり

私たちが暮らす上美生地域は、人口四百二十人程、芽室町の中心部から十六キロほど離れた集落です。

上美生地域には、小中学校、派出所、郵便局、小売店、パン屋さん、酒屋さんなど生活に必要な機能がそろっている環境で、以前より豊かな自然環境や、そこでの子育てを希望して移住してくる住民も多い、風通しのよい地域です。

上美生地域は住宅街の「上美生町内」の周りを農村地域が囲んでいて、全体で上美生地域となっています。



NPO法人上美生は二〇一八年三月に設立しましたが、その前に二〇一四年より「上美生ほしぞらプラン会議」という組織を、上美生地域の十年後を考えようという目的で立ち上げていました。地域住民にアンケート調査を行い、そこから地域課題を洗い出し、次年度に地域ビジョンを策定し、解決をするために活動していました。

その中の課題の一つに、JAめむろ上美生支所の閉店がありました。食材や日用品などを購入できる、上美生支所がなくなれば、お年寄りや子どもたちをはじめ地域住民にはとても大きな影響があり、いずれ上美生の集落がなくなることになるといいう危機感から、上美生にお店は必要という結論にいたりしました。

地域の意向から小売店と言う機能だけでなく、地域の交流の拠点になるような場所を作ろうということで、JAめむろ上美生支所閉店の後を引き継ぎお店を始めるために、NPO法人上美生が二〇一八年三月に設立されました。

これがNPO法人上美生設立のきっかけです。地域で設立した法人で、資本金もないので、寄付を地域から集めて設立



理事 蘆田 千秋さん

しました。設立趣旨は「上美生の地域住民が安心して暮らし続けられる環境を整え、基幹産業である農業を応援し、子どもを地域で育て、高齢者福祉を推進するとともに、地域課題の解決を目的に活動する」と決めました。

アイデアをひとつずつ実現

二〇一八年三月三十一日にJAめむろ上美生支所が閉店し、四月に理事が夜集まっては、店舗の掃除や棚の配置など、開店できる環境を整えるために準備しま

した。そして、五月八日に「みんなのお店カミビ」が開店しました。

NPO法人上美生が行っている事業は一番目に小売店「みんなのお店カミビ」の運営です。ここでは、以前に上美生ほしぞらプラン会議が地域の将来像をまとめた時に、「こんなことがあったらいいな」の意見の中に「地域のお野菜を地域のお店で販売する」というアイデアがあり、上美生店の時代にも実験で「ほしぞら市場」を行っていました。それが現在もお店の人気コーナーとなっています。二番目に「ふれあい広場ひ



だまり」というリーススペースの活用です。この場所は以前、金融やATMのあった事務スペースでした。ここではイベントをしたり、子どもが親の迎えを待つ場所として利用しています。また、月に一度居酒屋を開いて、地域住民が交流する場として活用されています。このスペースは地域の交流拠点とするために、芽室町が「道の地域づくり総合交付金」を活用して、トイレ、厨房とともに整備してくださいました。

三番目は地域交通です。二〇一四年に「上美生ほしぞらプラン会議」が行ったアンケ

ートで、上美生に元気に住み続けるために必要なものとして、①保育所、小学校、中学校の存続②お店の存続③交通手段という結果がでていました。

住み続けるためには、免許を返納しても交通の便があることが、この地域で暮らしていく上で、とても重要な課題として挙げられていました。

「上美生ほしぞらプラン会議」で社会実験を重ね、NPO法人上美生が設立されてからは、連携して実験を行いました。そして、二〇二〇年八月、NPO法人上美生が自家用有償旅客運送の申請を行いました。現在「地域交通カミビ」として運行しています。利用者は右肩上がりに増えています。二〇二一年度は百九十八名でしたが、二〇二五年度は一月末の段階で四百六十七名の利用者（延べ人数）があります。少しずつ地域に周知されてきています。

実験を始めたころ、協力してくれた小学六年生の子どもが高校生となり、通学にカミビを利用し、卒業時にはドラ

イバーにお礼のお手紙を書いて渡してくれました。地域の子どもと一緒にカミビも成長してきたんだと感じます。

長い目で見て、あきらめずに

地域にとっての課題解決をしていくため、色々な取り組みをやっていく中で大切だと思っているのは「どうやって想いを広げるか」「何を実践するか」「上美生らしさをどうやってを表すか」です。

目に見えるものではない想いは地域の皆さんに伝えることは難しいです。すぐに結果がえってくることはありませんが、継続してやるためには「一人でやらず、みんなで作る」「みんなを励まし合ってモチベーションを維持する」そして「自分の周りに少しずつ広げていく」ことが大切だと思っています。

その結果、行動する人の輪が少し大きくなるかもしれません。地域を継続していくことというのは、それくらい長い目が必要だと感じます。

今後の目標

地域にとって必要な仕事を、収益をあげることができたら地域に戻していきたいという趣旨で設立したNPO法人上美生ですが、活動していく中で難しいと感じる点もあります。「時代は変わっても変わらず大切にしていかなくてはならない」と、時代の流れとともに変わらなくてはならないことの判断。「人それぞれ色んな考えがあるのは当然なので、その中の合意形成」「地域の皆さんの中にある、上美生を大切に思う気持ちをどうやって活動に活かせるか」。

活動を必要とと思って、参加してもらうためにはこれらのことをどうしたらいいのか悩みながら過ごしています。

今後の目標は「お店の黒字安定化」「ひだまりの利便促進」「カミ便のドライブ確保と利用増」そして「新規事業拡大」といろいろありますが、それらはす

べて収益を地域運営に活かせるようにという思いからです。

そういった意味でもNPO法人上美生は地域の住民をつなぐ大切な役割があると考えます。コミュニティとしての役割が大切です。イベントなどで住民皆さんが地域にとって必要なのだと感じてもらえるようになったらいいなと思います。

元気な地域で住み続けられる地域であるためには、課題はまだまだたくさんあり、終わりはありませんが、あきらめず少しずつ進んでいきたいと思っています。

今回、町民活動支援センターのついでに上美生の取り組みを発表してもらおうかと街の方々にも上美生という場所を知ってもらおうことが少しできました。とても感謝しています。街の中も農村地域も同じ芽室町として、お互いが応援しあって、その結果、芽室町が素敵な場所になればいいなと考えています。

上美生老友クラブ会長

岡崎 栄太郎さん

上美生地区の老人クラブ、上美生老友クラブで代表をしています。会は九十名ほどの会員がいて、月一回の例会を開いています。会での楽しみの一つは「みんなのお店カミビ」に注文をしているお弁当です。いろいろと融通を利かせてくれることも助かります。また、自宅から会場までの移動に「カミ便」を利用して会員もいます。なかなか乗り合いができなくなってきた高齢の私たちは、とても助かっています。

この例会以外でも、通院や街中での用事を足す時など、この地域交通があるから不便を感じることはありません。

カミビでは月1回、居酒屋が開催されていますが、街中へ飲みに出かけなくなつたこの頃はそこに参加するのが楽しみです。毎回、集まった人たちで地域の昔話などして

いるんですが、何を話したか忘れてしまうから、次回もまた同じ話で笑っています。「自分たちも参加して、盛り上げよう！」と、この地域を大事に思っている人たちが集まってきます。

カミビは、普段着で、気兼ねなく立ち寄れる場所、今では「上美生といえどここ（カミビ）」という場所になっていきます。年を取ってから気づいたのですが、春は桜、秋は紅葉、と上美生の身近な自然の素晴らしさを感じています。街中に住んでいる皆さんもぜひ上美生に足を延ばしてカミビに立ち寄ってください。



公立芽室病院をみんなで支える会

地域医療を守るために

「公立芽室病院をみんなで支える会」は設立発足して十五年が経ちました。支える会が設立されたその頃は、全国の地方病院が医師不足や時間外受診いわゆるコンビニ受診などの問題に直面していたころです。芽室町でも、二〇一〇年四月、医師の退職があつて内科医が六名から三名へと減少しました。その結果、町民は不安を抱きその不安が病院への不満へとつながっていました。

一方でそこで働く医師や看護師にも大変な負担がかかつていて、頑張りによりなんとか診療体制が維持されていましたが、頑張っても感謝されることもなく不満ばかりが聞こえてくる毎日に、医師や看護師がどんどん疲弊していくような状況だったと聞いています。

町民として私たちに出来ることが何かないだろうか。

その頃、全国各地に地域医療を守ろうと活動する住民グループが生まれていて、住民が支援団体を作り、住民にやさしい病院づくりにかかわる地域が増えていました。

公立病院には、町が設置した公立病院運営委員会という組織があり、国保運営委員四名、学識経験者八名の計十二名で構成されています。公立芽室病院の経営計画の定期的な点検、町民としての意見の提案をするという会務の外に、地域医療を取り巻く状況を学習するという機会があり、公立芽室病院が町民のための病院、医師や看護師が働きやすい病院であり続けるために、なにか働き掛けることができないだろうか、と考えるようになったことで支える会の設立に動き出すことになりました。

活動開始

二〇一一年四月、公立病院をみんなで支える会が設立され、「できることから始めよう」をモットーにボランティア活動が始まります。

設立当時の活動内容は、美化活動として病院の前庭などの花壇を整備し花を植えたり、有志により生け花が飾られたりしました。会の活動と活動を共にする形で、寄せ植えの鉢を病院入り口に飾って頂く町民の方たちも現れて協力いただきました。



事務局長 村上 哲也さん

ました。待ち時間の気晴らしになればとロビーの空きスペースを利用しての児童書画展の入選作の展示をしました。

病院を知ってもらおう活動として、病院と支える会との意見交換会や講演会が開催されました。病院の職員から各種医療の取り組みについての話があったり、院長などから経営状況を含む病院の現状についての話があり、反響も大きく公立病院はそんなに頑張っているのか、そんなに苦労しているのか、だったら応援する、と多くの方が支える会へ入会して下さいました。

院内ボランティアの活動ということでは



インフルエンザの受付介助を実施しました。院内ボランティアについては支える会としてはもともととできることがたくさんあるのではないかと考えていたのですが、実際には院内での活動ということがいろいろな制限があったり、あまり歓迎されなかったと感じています。

現在の活動としては、美化活動、病院を知ってもらおう啓発活動、病院との協働で行う活動が行われていて、ロビーでの児童書画展示、院内ボランティアについては活動できない状況になっています。これは、あのコロナ禍に起因する諸事情によるもの大きな原因です。

コロナ禍を経て

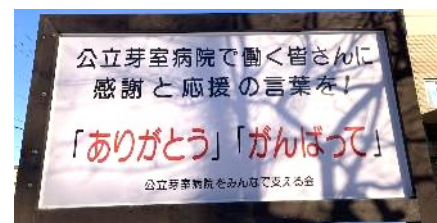
今でこそ多くの方がコロナに対してその人なりに理解しそれなりに対応できるようになってきていると思いますが、コロナ騒動期、コロナというものがあるのかよく分からず、全国での感染状況が連日テレビ等で報じられて、亡くなったりの方が何人になりましたとか、ワクチンがありませんとか、出来ましたとか、間に合いませんとか、接種が始まりますとか、打つ順番がどうとか、あげくにはワクチン接種しちゃうダメだとかいろいろなことがありました。

公立病院ではコロナ騒動の前に病院の経営計画の見直しもあり、また病床の利用率の低下に伴う減床(休床)を余儀

なくされていたということもあって、公立病院はコロナの指定病院になり、コロナ患者を受け入れ隔離入院させることになりました。

病院で働く医師や看護師にとっても初めての経験でしょうから苦労されたと思いますし、相当な訓練もされただろうと思います。一般診療があるって、並行してコロナ棟の対応をする。看護師などは、ベッド数の減少にともない多くの看護師が退職していたこともありコロナ禍にあつてほとんどん疲弊していると聞かえていました。

そんな中、コロナの院内感染が報じられました。道や保健所から相当な指導を受けたと思います。このままでは、頑張ってくれている医師も看護師もほとんどん疲弊してしまふ、町民として何かできることはないかと考えた時に、支える会は、公立病院で働く人たちが応援するために立ち上がった会だという活動の原点に気づいたので、支える会として何かできないか、そこで思いついたのがメッセージボードだったので。



メッセージボードの表裏には実は違いがあります。どちらが表で裏かはありますが、病院に向かっている面は病院で働く皆さんへの声掛け、道路に向かっている面は町民の皆さんへの声掛けです。

病院に向かってるのは、純粋に病院で働く皆さんに感謝と励まし、「ありがとう」と「頑張れ」の気持ちを伝えるもの。道路に向かっているのは、町民の皆さんから病院で働く方達に対し、「感謝と励まし」の言葉を贈りましょう」という意図をもって作ったものです。

設置後、院長、総看護師長はじめ職員の方々から逆に感謝の言葉を頂きましたが、なにより、支える会の会員ではない一般の町民の方から「あの看板いいね」と声をかけてもらい、嬉しかったことを覚えていきます。



公立芽室病院をみんなで支える会

事務局長 村上 哲也さん

**誰かが動き出せば
私も、と動き出す**

今回のセンターのつどいのテーマは「つながり」ということですが、公立病院と支える会、支える会と一般の町民、一般町民と公立病院、それらは、それぞれが間違いなくつながりの中にあります。

メッセージボードを設置した同時期に、青年有志が声掛けを行って集めた子どもたちからの応援メッセージが、公立病院に届けられています。その行動も、今、何かしたい何ができるかという思いからではなかったのかなと推察しますが、全く、支える会のメッセージボードの設置と発想を同じくする「できることから始めよう」という行動ではなかったのかなと思います。先にお話ししましたが、支える会が、花壇を整備して花苗を植えると言え、院内に生け花を飾ってくれるグループが現れる。寄せ植えの鉢を持ち寄ってくれるグループが現れる。

今後の活動

みんな何かしたいと考えているけれど、きっかけをつかめない。誰かが動き出せば、それなら私にもできると続いて動き出す。そういったつながりに支える会としても助けられています。

支える会の今後の課題としては、支える会は発足以来十五年を数えました。会だけでなく私たちも十五才年齢を重ねました。支える会発足当時、二年間をめぐりに活動するということで動き出した経緯もあり、事務局としては、三年目に入る頃に二年経ちましたがどうしますかという確認をさせて頂きました。即断、鳥本会長から「今はまだやめられない」という発言があったので活動を続けています。その後、二年をめぐりに始めた会だったが、話をさせて貰っています。他の幹事さんからも会としての活動をやる話が出ることはあります。十五年経っていますから、個人的

には役員幹事をやめたいと考える人はいると思いますので続いてくれる若い人の存在というのが会としての課題です。もう一点、支える会に求められるものが、単に病院を応援するボランティアグループから、芽室町における将来の公立病院の姿、経

公立芽室病院事務局長補佐

杉本 康次さん

当院は「公立芽室病院をみんなで支える会」の皆さまに温かいご支援を継続的にいただき、日々支えていただいております。

毎年の当院主催の病院まつりには欠かさずご参加いただき、また毎週ロビーに生けてくださる花々は、患者さまやご家族、職員の心を明るくしてくださっています。

さらに、地域医療講演会の開催や花壇整備など、町民の皆さまと当院をつなぐ数多くの活動に、長年にわたり尽力していただいていることに、心より感謝申し上げます。

営状況や医療体制、地域包括システムのうちの公立病院の役割などを町民の皆さんにお伝えする機会づくりというところへ向かっていくように感じられます。それはそれで必要だし、大切なことだし、誰かが伝えなければならぬと考えます。

特にコロナ禍という困難な時期には、当院職員への感謝を表す看板を設置していただきました。未知のウイルスへの対応に疲弊していた当院職員にとって、その言葉は心に深く響き、何度も励まされました。こうした支えがあるからこそ、私たちは地域医療を担う病院としての役割を果たすことができていると思います。職員一同、皆さまの思いに応えられるよう、今後も努力を重ねてまいります。



